

都市公園における遊具の安全確保に関する指針（案）

0．まえがき

0 - 1 指針の位置づけ

この指針は、都市公園において子どもの安全な遊び場を確保するため、子どもが遊びを通して心身の発育発達や自主性、創造性、社会性などを身につけてゆく「遊びの価値」を尊重しつつ、子どもの遊戯施設の利用における安全確保に関して、公園管理者が配慮すべき事項を示したものである。

0 - 2 対象と適用範囲

この指針の対象となる遊戯施設は、都市公園における遊戯施設のうち、主として子どもの利用に供することを目的として、地面に固定されているものとする（以下、「遊具」と言う）。

ただし、管理者等が常駐し施設の管理だけでなく遊びを指導し見守っている遊び場に設置された遊具や特別な利用を目的として製造もしくは改造された遊具については、一般の遊具とは利用形態が異なり、個別に安全確保を行うべき遊具であることから、この指針の対象としない。

この指針の対象となる利用者は、幼児から小学生（おおむね3歳から12歳）を基準とし、このうち幼児の利用については保護者が同伴していることを前提とする。

1 . 子どもの遊びと事故

1 - 1 子どもの遊び

1) 子どもと遊びの重要性

子どもは遊びを通して自らの限界に挑戦し、身体的、精神的、社会的な面などが成長するものであり、また、集団の遊びの中での自分の役割を確認するなどのほか、遊びを通して、自らの創造性や主体性を向上させてゆくものと考えられる。

このように、遊びはすべての子どもの成長にとって、重要かつ不可欠なものである。

2) 子どもの遊びの特徴

子どもが遊びを通して冒険や挑戦をすることは自然な行為であり、子どもは予期しない遊びをすることがある。

また、子どもは、ある程度、危険性を内在している遊びに惹かれ、こうした遊びに挑戦することにより自己の心身の能力を高めてゆくものであり、子どもの発達段階によって、遊びに対するニーズや求める冒険、危険に関する予知能力や回避能力に違いがみられる。

3) 遊びと遊具

遊具は、冒険や挑戦、社会的な遊びの機会を提供し、子どもの遊びを促進させる。子どもが自らの限界に挑戦できる遊具は、子どもにとって魅力的であるばかりかその成長に役立つものでもある。

また、子どもは、さまざまな遊び方を思いつくものであり、遊具を本来の遊びとは異なる遊びに用いることがある。

1 - 2 リスクとハザード

1) 遊びにおけるリスクとハザード

子どもは、遊びにおいて冒険や挑戦をし、心身の能力を高めていくものであり、それは遊びの価値のひとつであるが、冒険や挑戦には危険性も内在している。

子どもの遊びにおける安全確保にあたっては、遊びに内在する危険性について、遊びの価値のひとつでもあり、事故を未然に回避する能力を育む危険性あるいは子どもが判断可能な危険性であるリスクと、事故につながる危険性あるいは子どもが判断不可能な危険性であるハザードとに区分して考えるものとする。

2) 遊具に関連するリスクとハザード

遊具に関連するリスクとハザードには、それぞれ物的な要因、人的な要因とに分けることができる。

例えば、通常子どもが飛び降りることができる遊具の高さは物的リスクであり、落下防止柵を越えて飛び降りる行為は人的リスクである。

一方、遊具の不適切な配置や構造、不十分な維持管理による遊具の不良は物的ハザードであり、遊ぶのには不適切な服装や故意の損壊による遊具の不良は人的ハザードである。

1 - 3 遊具に関連する事故

遊具に関連する事故には、衝突・接触・落下・挟み込み・転倒などがあり、裂傷・打撲・骨折などの傷害をもたらすことになる。

事故の状態としては、生命に危険があるか重度あるいは恒久的な障害をもたらすもの、重大であるが恒久的でない傷害をもたらすもの、軽度の傷害をもたらすものの3段階に大別することができる。特に頭部の傷害は重度の障害につながることもあるので十分な配慮が必要である。

2. 遊具における事故と安全確保の基本的な考え方

2 - 1 遊具の安全確保に関する基本的な考え方

遊具の安全確保にあたっては、子どもが冒険や挑戦のできる施設としての機能を損なわないよう、遊びの価値を尊重して、リスクを適切に管理するとともにハザードの除去に努めることを基本とする。

公園管理者は、リスクを適切に管理するとともに、生命に危険があるか重度あるいは恒久的な障害をもたらす事故（以下、「重大な事故」と言う）につながる可能性のある物的ハザードを中心に除去し、子ども・保護者等との連携により人的ハザードの除去に努める。

子どもと保護者は、遊びには一定の自己責任が伴うものであることを認識する必要があり、保護者は、特に、自己判断が十分でない年齢の子どもの安全な利用に十分配慮する必要がある。

公園管理者と保護者・地域住民は、連携し、子どもの遊びを見守り、ハザードの発見や事故の発生などに対応することが求められる。

2 - 2 安全確保における公園管理者の役割

1) 公園管理者の役割

公園管理者は、遊具の安全確保の基本的な考え方に従って、計画・設計段階、製造・施工段階、維持管理段階、利用段階の各段階で遊具の安全が確保されるよう適切な対策を講ずるものとする。

公園管理者が各段階毎の業務を委託する場合には、各段階に係わる者に対し同様の対応を求め、適切な指示・承諾・協議などを行う。

また、事故が発生した場合は、事故の再発防止のための措置を講ずるとともに事故の状況を記録し、その後の管理に反映させる。

2) 保護者・地域住民との連携

遊具の安全確保にあたっては、公園管理者のみで行なうことは難しく、遊具の安全確保に関する基本的な考え方を踏まえ、保護者・地域住民と連携することが不可欠である。

このため公園管理者は、保護者・地域住民との間において、安全点検、子どもの遊びを見守ること、危険な行動への注意、事故発生時の連絡などについて、都市公園の管理を通して協力関係を醸成していく必要がある。

また、子どもの遊び場に関わる民間団体との連携を図り、子どもと保護者・地域住民に対し、遊具の安全確保についての普及啓発を行なうことが望まれる。

3.各段階での安全対策の指針

3 - 1 計画・設計段階

1) 遊び場の立地選定

遊び場の立地選定は、安全確保の観点から周辺の土地利用などに応じた安全な経路や見通しなどを考慮した利用動線を確保するとともに、遊具が設置される場所の地形、排水などの遊具の耐用年数などに大きな影響を与える環境条件に考慮した安全対策を講ずる。

2) 遊具の選定

遊具の選定は、地域の年齢構成、遊び場の分布、利用状況などを調べて地域ニーズを踏まえた上で、利用する子どもの年齢構成に応じた遊びの形態を想定し、種類や規模などを決定する。

遊具の種類や規模の決定にあたっては、幼児と小学生では運動能力や危険回避能力が大きく異なるため、対象とする子どもの年齢層を踏まえて、例えば、幼児の多い地域には幼児に適した遊具を取り入れるなど、遊具自体や各部の寸法などを検討する。また、重量が大きい可動性の遊具の選定にあたっては、利用する子どもの年齢構成や遊びの形態について十分に配慮する。加えて、過剰利用による事故を防ぐため、人気のある遊具については過密にならない範囲内で、複数設置することなどに配慮する。

3) 遊具の配置

遊具の配置は、遊具と遊具周辺にいる子どもの衝突事故などを防ぐため、遊具周辺も含めた利用動線や各遊具の運動方向を考慮した安全領域などに配慮する。

落下のおそれのある遊具については、硬い設置面への配置を避けるとともに、必要に応じて、設置面による衝撃の減少についても配慮する。

幼児と小学生の双方が共用できる遊具もあるが、一方の年齢層の利用には適さない遊具もあり、能力に適合しない遊具の利用による事故や衝突事故を避けるため、幼児用遊具と小学生用遊具の混在を避けるなどの安全対策を講ずる。

4) 遊具の構造

遊具の構造は、全体が子どもの利用に応じた十分な強度を持つ必要があり、特に、動きのある遊具では、全体の構造のみならず細部の構造についても動きに対応した強度を持つように配慮するとともに、以下のような安全対策を講ずる。

絡まり・ひっかかり対策

- ・衣服の一部が絡まったり、身体がひっかかるでっぱり、突起、隙間などを設けない
- ・突起の形状に留意し、埋め込み、ふたを被せるなど工夫する

可動部との衝突対策

- ・可動部と地面の間に適切なクリアランスを確保する
- ・可動の度合いを制御する

落下対策

- ・落下防止柵を設ける
- ・登れないように足がかりをつくらない

挟み込み対策

- ・身体の一部が引き抜けなくなるような開口部や隙間を設けない

その他の危険対策

- ・つまづかないように基礎部分を埋め込むか、垂直に立ち上げず設置面にすり付ける
- ・遊具のどの部分にも、切傷や刺傷の原因となる鋭い尖端、角、縁（ふち）ささくれをつくらない
- ・部品や部材を簡単に外すことができないようにする

救助対策

- ・救助できるようにするため内部に大人が入れるようにする

また、遊具は屋外に設置され、風雨にさらされるものであることから、材料の耐水性や耐候性、仕上げにも配慮する。また、遊具の構造は点検整備、部品交換のしやすいものとする。

3 - 2 製造・施工段階

1) 遊具の製造

遊具の製造は、製造者に対して、設計図書に基づき、計画・設計段階における遊具の構造に起因する物的ハザードの除去対策を踏まえ、製造時に設定された期間において、十分な安全確保を図るため、材料に適用される日本工業規格等の諸規格に沿って、経年変化による材料の変化等を勘案して、毒性がなく耐久性のある材料の使用および加工・仕上げ、接合方法等、製造の各段階における品質管理を徹底するよう、指示・承諾・協議などを行う。

なお、遊具の維持管理における留意事項を把握するため、必要に応じて、製造者に対して、遊具の材料、構造など、遊具の安全確保に関わる資料の提出を求める。

2) 遊具の施工

遊具の施工は、施工者に対して、設計図書に基づき、計画・設計段階における遊具の構造に起因する物的ハザードの除去対策を踏まえ、十分な安全確保を図るため、基礎部分の設置面への収め方など利用者の安全確保と遊具の耐久性に配慮した地面への固定方法、組み立て、接合、仕上げ等、施工の各段階における品質管理を徹底するため、指示・承諾・協議などを行う。

なお、子どもの多い場所で施工する場合には、施工者に対して、資材搬入時や施工時から供用開始までの期間に、公園の利用者に対する安全確保が図られるよう指示を行う必要がある。

3 - 3 維持管理段階

1) 点検手順に従った確実な安全点検

遊具の維持管理は、遊具そのものの性能確保に関する点検・修理にとどまらず、子どもにとって安全で楽しい遊び場であるかという視点を持って行うことが必要である。遊具の構造を要因とする物的ハザードの発見・除去を中心に確実な安全点検を行うため、管理計画を策定し実行する。

安全点検は、維持管理全体の中で最も基本的な作業である。安全点検には、初期の動作確認のために製造・施工者が行う初期点検、公園管理者が行う日常点検および定期点検、専門技術者が行う精密点検があり、これらの安全点検を確実にを行うものとする。

特に、日常点検においては、腐食、変形、摩耗、部材の消失などに注意し、必要に応じて専門技術者による安全点検を行うものとする。

2) 発見されたハザードの適切な処理

発見された物的ハザードについては、その程度に応じて遊具の使用制限、補修などの応急措置を講ずるとともに、修理、改良、撤去、更新などの恒久的な措置の方針を迅速に定めて実施する。

なお、応急措置を講ずる際には、恒久的な措置を講ずるまでの間に、事故が発生しないよう現場の管理に留意する。

3) 事故への対応

事故が発生した場合、負傷者への対応や再発防止対策を速やかに講ずる必要があるため、遊び場には関係官署や公園管理者の連絡先を掲示することが望ましい。

事故後の対応としては、事故のあった遊具への迅速な応急措置および恒久的な措置、事故原因の調査などを行い再発防止に努める。

4) 事故に関する情報の収集と活用

事故については、発生状況の記録と分析を行い、事故の再発防止、遊具の改善などに反映させることが必要である。

事故の発生状況などの情報については、遊び場や遊具に携わる者が共有・交換し、相互に役立てることが望まれる。

3 - 4 利用段階

1) 遊具の利用状況の把握

設置した遊具の利用実態を知ることは、安全管理において重要であり、子どもと保護者・地域住民の協力を得て遊具の利用状況を把握し、維持管理や改修などに活かすことが必要である。

2) 安全管理の啓発と指導

遊具に関わる事故を未然に防ぐためには、遊具の利用状況を踏まえた上で、公園管理者と子ども・保護者や地域住民との間で、遊具の安全確保のための対策や相互の役割分担などについて共通の認識を持つことが重要である。

遊具の安全管理には、子どもや保護者の協力が不可欠であるため、公園管理者は、地方公共団体内の関係部署や地元自治会、地域住民との相互協力のもとで、子どもや保護者が自らの服装や遊具の異常にも注意を払うなどの、都市公園での安全で楽しい遊び方についての普及啓発にも配慮する。

なお、事故防止のための指導にあたっては、子どもの遊びは本来自由で自発的なものであり、過度に制約的にならないように注意する。

3) 子どもと保護者・地域住民との協働によるよりよい遊び場づくり

都市公園には、通常、公園管理者が常駐していないため、保護者・地域住民と連携し協働による安全な遊び場づくりに取り組むことが望ましい。

遊具を多く使うのは子どもであり、子どもの視点を尊重した安全で楽しい遊び場づくりとともに、保護者や地域住民が日頃から子どもの遊びに対して関心を持つよう協働作業等を通して、共通認識を形成することも重要である。

また、遊び場に関わる民間団体との連携を図り、子どもと保護者・地域住民に対し、遊び場を安全で楽しく利用するための普及啓発を協働で行うことが期待される。